

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
総括研究報告書（令和2年度）

高齢者がん診療指針策定に必要な基盤整備に関する研究

研究代表者 田村 和夫
福岡大学 研究特任教授

研究分担者 齊藤 光江
順天堂大学医学部 教授

研究分担者 佐伯 俊昭
埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科 教授

研究分担者 内富 庸介
国立がん研究センター中央病院支持療法開発部門 部門長

研究分担者 高橋 孝郎
埼玉医科大学国際医療センター支持医療科 教授

研究要旨

高齢者のがん医療に関する日本の現状をQ&Aの形で総論を報告した後、各がん種における治療の現状を「高齢者がん医療Q&A、臓器別編」としてまとめた。さらに高齢者がん診療指針策定に向けてガイドライン委員会を設置し、モデル事業として「プレフレイル高齢大腸がん患者のための臨床的提言」をまとめることができた。これら一環の研究事業を通し、人材育成が図られ、彼らを中心に高齢者がん診療ガイドライン作成委員会を設置し、具体的なガイドライン作成に着手した。また、その基盤となる老年腫瘍学のテキストブック作成にも着手した。

A. 研究目的

高齢者がん診療ガイドライン策定に必要な基盤整備をすることを目的とする。

B. 研究方法

- ・研究班と高齢者がん医療協議会、日本がんサポーターケア学会が協働し、多くの協力者の支援を得て高齢者がん医療に関する教育・研究・診療について議論し、具体的な事業を展開する体制をとっている。
- ・令和2年度は、過去2年間の事業を継続し、これまでのエビデンスを収集・解析してQ&Aの形で臓器別の高齢者の治療についてまとめる。
- ・これらの研究成果から高齢がん医療に関する問題点が抽出され、令和1年度に設置された高齢者がん診療ガイドライン委員会のもとモデル事業を実施する。高齢がん患者を非高齢者と同様のがん治療が可能な全状態の良いフィット群、介護が必要でがん治療が困難なフレイル群の中間にあたるプレフレイル群に分類する。その中で臨床上もっとも問題となるプレフレイル高齢がん患者

を対象にそのマネジメントを検討することにした。モデル事業として大腸がんを選び、総論—高齢者機能評価、外科治療、内科治療、放射線治療、支持・緩和医療、医療経済の6ワーキンググループ（WG）を設置して議論し、臨床的提言をまとめる。

- ・外科治療委員会は、高齢者の外科診療の現状に関するアンケート調査を実施する。

- ・医療経済委員会は、高齢者のがん治療の費用対効果の検討を開始する、その中で効果の指標としてのQOL評価について臨床研究を開始する。また、上記モデル事業のWGを結成し、プレフレイル高齢大腸がん診療における費用対効果について議論をし、まとめる。

- ・脆弱な高齢がん患者を診療するにあたって、避けて通れないのは、医療だけでなく、患者をサポートする介護体制である。そこで、がん診療に携わっているがん診療連携拠点病院、地域の中核的な医療施設（市町村の病院）と在宅医療を行っている診療所に「医療と介護の連携」についての調査を実施する。

・以上の研究成果が得られれば診療ガイドラインのための基盤整備はできたと評価でき、高齢者がん診療ガイドライン委員会のもと作成委員会を設置し、具体的なガイドライン作成に向けて検討を開始する

・高齢者のがん医療を支える学問である老年腫瘍学テキストブックの作成を検討する。

・これまで本研究班、高齢者がん医療協議会、日本がんサポーターブケア学会が協働で議論してきた方向性が、患者・家族、市民のニーズに合っているかを、公開で意見交換会を開催する。

C. 研究結果

「高齢者がん医療Q&A」総論を公表ののち臓器別の高齢者がんの治療についてエビデンスをまとめ令和2年10月に「臓器別編」として発刊した。

モデル事業のプレフレイルな高齢大腸がん患者のマネジメントについて、診療に直結する5WGから臨床的提言をし、第58回日本癌治療学会でのコンセンサスミーティングで合意を得て、日本大腸肛門病学会誌に投稿中である。なかでも非高齢者と異なるclinical outcomesの議論は重要である。高齢者では生存期間の延長だけではなく、健康寿命の延伸、残された余命とがん特異的な生存期間との検討、フレイル群が加齢とともに増加し、多くの課題が存在することが明らかとなった。

外科委員会による高齢がん患者の外科診療に関する実態調査は令和2年10月に終了し、解析・論文作成中である。この成果をもとに次研究のプロトコールを作成中である。

医療経済委員会は、治療の費用対効果を評価するにあたって調剤薬局と大学の薬学部、がん専門病院薬剤部が協力して外来化学療法を受ける患者を対象に実態調査のためのアプリを開発し、SARS-CoV-2 pandemicで遅れたが、患者登録が開始された。また、高齢者のがん薬物療法について医療経済の視点から臨床的課題を立て、文献検索と臨床的提言を行った。（資料①）

医療と介護の連携についてのアンケート調査を実施した結果をまとめ、国内外の学会に抄録を登録した。（資料②）

この3年間の研究事業を通し人材育成が図られたと判断し、彼らを中心に高齢者がん診療ガイドライン作成委員会を結成した。また、具体的に作成を実施していくためのコアメンバーからなる運営委員会を同時に設置し、議論を開始した。また、高齢者がん医療を議論するにあたり基盤となる学問としての老年腫瘍学のテキストブックの作成も同時進行で着手した。（資料③）

全国がん患者団体連合会と協働で公開シンポ

ジウム「高齢者のがん医療を考えよう」をWeb会議システムを利用し開催した。これまで議論し作成した「高齢者がん医療Q&A」「プレフレイル高齢大腸がん患者のための臨床的提言」の概要を提示し、患者・家族一般市民の方たちと議論をした。本研究班の協力者には患者代表も入っていることもあり、患者や家族の考えや思いが検討されたことを理解いただいた。ただ、多くの課題があることも討論の中でも、会終了後のアンケートでも指摘された。さらに、今後予定されている高齢者がん診療ガイドライン作成にあたっては、患者・家族が早期より参加できるように希望があった。（資料④）

D. 考察

高齢者がん診療指針策定に必要な情報を得るために文献検索を行い、エビデンスが限定的ななかでも総論に続いてQ&Aの形で臓器別の治療についてまとめることができた。現時点における治療に関する適切な情報を医療の現場に提供できたものとする。

さらに、複数の調査研究や臨床研究が、班員や高齢者がん医療協議会（コンソーシアム）委員から提案・開始されたことは、本班研究を通して‘高齢のがん患者’、とくに脆弱な患者のマネジメントという難題に取り組む研究者が育成されてきたことを示唆する。

日本ではまだ認知度が低い学問である老年腫瘍学の確立ならびにエビデンスの少ない領域で高齢者がん診療ガイドライン作成は極めてchallengingであるが、すでに超高齢社会に入った日本において遅きに失したとは言え、教育・研究・診療に不可欠のものであり、老年医学ならびに腫瘍学のエキスパートによる活発な議論と患者・一般人を巻き込んだコンセンサス形成が喫緊の課題として積極的に取り組まなければならない。

E. 結論

日本のがん医療の教育・研究・診療の現状をまとめ、重要な臨床的課題を抽出することができた。この研究成果をもとに高齢者のがん診療において適切な指針を作成していくことが求められる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

田村和夫・他：「プレフレイル高齢大腸がん患

者のための臨床的提言」総論・高齢者機能評価に関する提言 Part1、2. 日本大腸肛門病学会雑誌、2021; 74 (5) : 269-286

2. 学会発表

1) 「高齢者がん診療ガイドライン策定に向けて～プレフレイル高齢大腸がん患者のための臨床的提言」コンセンサスメETING

司会：田村和夫、唐澤久美子先生

各WGからの提言

内科治療WG長	相羽恵介
放射線治療WG長	室伏景子
外科治療WG長	吉田陽一郎
支持・緩和医療WG長	石黒洋

第58回日本癌治療学会学術集会、令和2年10月22日、京都市

2) 「高齢者のがん医療を考えよう」

公開シンポジウム、令和3年3月6日

Web開催

司会・ディスカッション：松本陽子、桜井なおみ、天野慎介、桜井公恵

演者：田村和夫、唐澤久美子、海堀昌樹、小川朝生、山本寛

3. 書籍

高齢者がん医療Q&A、臓器別編
金原出版 令和2年10月

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし